

短詩集

風立つ村

田邊哲司

大きくて円きメロンが空より降る夢を見しとぞ子がメロン食ふ

アフリカにインドに飢餓の民在るに飽食われは罪人ならん

いじめられしよぼくれ顔の子を見れば幼き頃のわれに似てをり

夢もちて生きんと思ひし決意はや萎えて家こもる時雨降る日に

橙の実の落ちてあり朝のみちに早春の雨ひかり降りつつ

さやさやと野をわたり来る風ありて草深村にこころのいこぶ

ひうひうと喉笛立てて眠る子も添寝の妻のかたちもあはれ

胎内に宿すわが子の夢見しと妻よりきけば神秘をおもふ

秋だねといま起き来たる妻が言ひ朝顔の花をふたり見てをり

そばかすの顔親しかりし九ちゃんが逝きしときけど信じがたしも

港への広場は楽の鳴り響きジーザスクライストの演劇しをり  
虫の音をききつつちびりちびり飲む日本酒うまし夜長の頃は  
何かしらつよき力に導かれ今朝も疎ましきネクタイしむる

幼子のしまひ忘れし白粉花の種が机にからりと落つる  
刻々と酸性の雨覆ふといふ地球の森はいつかほろぶか

夢見つつ泣いたるらしく目覚めたる顔何となくこはばりやまず  
けふ限り通園やめし幼子がお別れ画集をわれに見しむる

漬菜干す媪に乞ひて懐かしき牛舎をのぞく秩父の村に  
次子生むに帝王切開されるとぞ妻よりきくも言葉のいはず  
平等の意識などなく審議官と緊張しつつ会話してをり

ジオットが画像捉へし彗星の核はピーナツの形せるとぞ

年若き財政課長がふむふむとわが説明に相槌をうつ

円錐に折りし葛の葉に掬ひたる清水をのめば時経りにけり

思はざる訃報をききて来し渚海の青さも悲しく見ゆる

青空を仰ぎておもふ青空の果てにつづかん闇なる空を

仕事にて素通りしゆく故里にいざなふごとく彼岸花さく

長針の音がことりと耳に入り永かりし昭和いま終りけり

自らの欲を律することかたく食抑ふれば酒多くのむ

夢のなかしばしば通ふ地下街の幻の酒店にまた憩ひけり

せせらぎに和蘭芥子さく頃は日ながくなりしゆふべ楽しも

治安軍集結したる北京より帰り来し友の葉書が届く

職を得てより十五年をりをりに病む頸肩を妻のみぞ知る

蟬のごとなりてかなしもおほ母は組める両手に数珠を握れる

サイホンの原理のごとく民衆はかつて死の壁なりしを越ゆる

帰路にともる家の灯なつかしむ空腹なりしかつての日々は

われを追ふ男を吉備真備とぞ夢に思ひし混沌あはれ

過疎つづく村の運動会ひとしきり鼓笛の鳴りて消防隊いづ

死臭ただよふ墓地の夢より覚めしかば余韻のつづく冬のあかとき

みづからの残汁のなか剥かれたる馬珂貝の身のしばらく動く

ひもすがら事務を執りつつ野に出たく或は渚に行きたくおもふ

戦争の一面にして偽りの戦果たがひに報ずるあはれ

ライバルの出でしよと母言ふみれば猪が山芋を掘りし穴あり

山帰来さく岬道まなかひに鈍色にみゆ玄界灘は

顧みれば十三時間働きしけふも日記を記して終はる

眼にみえぬ意識のゆゑに絶つことの難しからん差別といふは

水落とす人小屋とる人らゐて梅雨晴れし日の村の明るさ

わが母が離婚の意思を固めたる夢より覚めて悲しみつつく

をさなこの乳齒の抜けしことなどもけふ一日の嬉しき一つ

われよりも若き人らが通勤の電車にふえて日々通ひゆく

寒ざむとそそぐ月光あふぎつつ幼子の眼は何刻みあふ

こぼろぎの鳴く荒畑は夕光に唐辛子の実赤くいろづく

青くさき草の香のして秋いまだ長げざる山に自然薯を掘る

妻の手を経ざるものなし日の匂保つ布団に寝ねんとしつつ

とめどなく鼻水いつる一日にて忙しきままわれは勤めり

草草のまばらとなりし庭畑の土にしみ入ることく日がさす

日々われに何かをなせと促せる見えざる力思ひいでをり

眠りたきわれの躰の内面をうち叩くことき意志とは何か

澄みとほる朝の光はかたまりて咲きたる菊の花群にあり

自らを賣むる心がわが内にありて勤に駆り立つるらし

おのづから一方へ向くわが意志が日に照る冬の草を寂しむ

暖かき布団に寝るもつづまりは他の貧困のうへに成り立つ

生命ある物をあつかはぬ勤にて幾何学化するわれとぞ思ふ

対立の多き組織に勤めつつ世に尽くすことたは易からず

一片の葉書に記す人の死はおこそかにしてかくも静けし

湾岸戦争ソ連崩壊などわが心揺るがしめたる一年暮るる

一年の勤を終へし安けさに窓ごしに雪ちらつくを見る

犬を買ふ日の朝がきて早ばやと目覚めし子らの話す声する

岸壁に野積されたる石炭の思ひ出のこし叔父は逝きたり

朝ごとに駅にて仰ぐ太陽が質屋の屋根を越えてけふ見ゆ

わが向かふ日記の文字が脈うちて回るが如くけふも酔ひたり

蛇崩のみち春さむく底こもる川の音するところを歩む

花卉を水に散らししことあらん梅の咲きをり蛇崩の道

按摩にてほぐれし躰かるくして春一番の吹く道あるく

先生の魂ちかくあれかすと夜の臥床に希ひつつるき

大きなる体格にしてこの犬の臆病癖のいまだ治らず

今宵またほとほと酔ひて世の中を統べたる如き錯覚あはれ

数百のえびねの花の群ら立てる庭の一角浄土のごとし

光りつつ水流れゆく両子川クレソンの花しろじろと咲く

捕らへたる蛍の光つめこみし壇を抱きて幼子眠る

東西の国の均衡くしれゆき民族和合の課題を生ず

若かりしわれを励ましてくれし人阿部芳子様御霊やすかれ

梅雨の香と草の香まじる故里の道に異物の如きわが立つ

わがうちに悲しみもちて日々通ふ道夕ぐれて梅雨明けの風

空明けてゆく安けさは一日のとりとめのなき時につづかん

道のへの雑木林に葛の花さきたるみえてわが村寂し

いろりゴム長袖無リヤカー日本脳炎棕櫚の蠅叩氷菓売の鉦

かつて見しカスイ神父の霊のこと緊張しつつ人に告げをり

静けさを悲痛に思ふことのありわが臥床まで秋長くる夜

幼き日泳ぎし川に子どもらを遊ばしめつつ見守りてをり

職場にて電話をとれば懐かしき俳人中原道夫の声す

自らを日々に消耗し尽くしてわれにいかなる未来のあらん

夜の更にながめれば秋たくる風とし思ふ寂しき音す

けだものの臭に馴れて秋日照る庭に互みにしばらく憩ふ

秋の夜の何ゆゑとなき寂しさに神を思へり内なる神を

さむざむと秋しぐれ降る街上の高きポプラの傍らをゆく

自らを抑制しつつ同僚がさしさはりなき会話してをり

紅葉の木々ひとさまに傾ける谷のしづけさ水のしづけさ

ふとわれの辺りをみれば灰皿のとおく遠くに冬の闇あり

慈愛といふ求め来りし道遠し四十にしてなほ迷ひつつ

さむざむと堤に波の立ち上がる和間の寂しき海岸に立つ

生む益を患者に還元するといふ医師の言葉をさがしみて聞く

とどこほる朱緩みつつ暁の空おもむるに明けてゆく見ゆ

そんな事言ふのが記事になるよとぞ受話器より来る圧力のあり

遠々に風起こる音きこえつつ三月尽の夜はさびし系

若草と土の匂のただ中に早蕨をつむこの里山に

わが意志が部下を拘束するならんその功罪にひすがら悩む

樹林より蒼き光を放ちる湖オンネトーにわが歩み寄る

ゆく夏をともに惜しみて子どもらとこの山峡の小川に泳ぐ

決断をしてわが日記焼き捨てし日のまざまざと今も忘れず

このわれを生かしむる大き他力あり秋長くる夜の静寂におもふ

単簡に変はる一日を嘆くこと多し夜更に歌作る時

所有するわが空間を定めゆく様さながらにブロック積まる

やはらかき土を踏みつつ白じろと齋咲きたる田中に遊ぶ

わがうちに無数の細胞あることを思ひつつ春の夜更けてゆく

乱れたるわれの心を辛うじて鎮めんがため焼酎を飲む

あしざまに言はれし後に自らを省みをれば存在かなし

故里に老いゆく父と母とをり離りて住むもななくなりたり

忙しい日々つつげば考ふる用なき時の空白を欲る

農業の廃れんとする映像を見つつしをれば泪あふるる